



---

---

# あたらしい 農業技術

---

---

No.559

緑鮮やかな多収性の晩生品種

「ゆめするが」

平成 23 年度



# 要 旨

## 1 技術、情報の内容及び特徴

- (1) 「ゆめするが」は、「おくひかり」を種子親に、「やぶきた」を花粉親として1986年に交配した実生群から選抜し、2010年に品種登録出願、同年出願公表された茶新品種である。
- (2) 「ゆめするが」の早晚性は、一番茶摘採期が「やぶきた」と比較して4日遅く、「おくひかり」よりも1～2日早い「やや晩生」である。
- (3) 「ゆめするが」の耐寒性（赤枯れ）は中であり、耐病虫性は炭疽病が弱、赤葉枯病、輪斑病がやや強、赤焼病が中、クワシロカイガラムシがやや弱である。
- (4) 「ゆめするが」の収量性は、10a当たりでは一番茶、年間とも「やぶきた」と比較して30～90%多く、摘採面当たりでも20～50%多い多収性である。
- (5) 「ゆめするが」の品質は、外観、内質ともに良好であるが、特に色沢、水色が優れる。荒茶成分ではタンニン、カテキン類が少なく、クロロフィル類が多い傾向である。
- (6) 「ゆめするが」の嗜好調査では、回答者の75%が水色を高く評価し、57%が導入や購入に前向きな意向である。

## 2 技術、情報の適用効果

- (1) 「やぶきた」と比較して一番茶摘採期が4日程度遅いため、組合せ栽培が可能であり、摘採期の分散、製茶工場の稼働率向上などに有効である。
- (2) 色沢、水色面の品質が特に優れ、市場評価の高いことが期待できるため、多収性の特性と併せ経営の安定化に寄与できる。

## 3 適用範囲

- (1) 本品種は調査した本場（牧之原）、山間地（川根）、富士分場（東部地域）において、生育が良好で、収量性、品質性も「やぶきた」以上であることから、県下全域に導入可能な品種である。
- (2) 本品種はやや晩生で収量性が高いため、品種組合せを行う大規模な機械化栽培経営に最適である。

## 4 普及上の留意点

- (1) 寒害（赤枯れ）の発生がやや多いため、常襲地などでは対策が必要である。
- (2) 芽数型のため、計画的な更新などにより適正な収量構成の維持が必要である。

## 目 次

はじめに	1
1 来歴及び試験経過	1
2 一般特性	1
(1) 早晚性	1
(2) 生育特性	2
(3) 寒害及び病虫害抵抗性	2
3 収量特性	3
4 品質特性	4
(1) 官能検査	4
(2) 荒茶成分	5
5 特性のまとめ	6
6 適地及び栽培上の留意点	6
7 嗜好調査結果	7
おわりに	8
参考文献	8

## はじめに

「やぶきた」が誕生してから100年あまりが経過しました。スーパー品種「やぶきた」は、現在、全国の茶園の75%、静岡県に至っては実に93%に普及し、本県茶業のみならず、日本茶業発展の原動力となってきました。

しかしながら、近年では摘採期の集中化や香味の画一化など「やぶきた」偏重の弊害が顕在化し、低迷する茶業情勢の中で、新しい品種の開発、普及が急務となっています。

このたび当研究センターにおいて育成した「ゆめするが」は、生育、品質面等の特性が優れ、本県茶業振興に寄与する品種と考えられますので、本品種の普及拡大を図るために諸特性を紹介します。

### 1 来歴及び試験経過

- ・1986年 交配（♀おくひかり×♂やぶきた）
- ・1989～1993年 個体選抜
- ・1993年 苗床選抜
- ・1994～1999年 栄養系比較試験
- ・2002～2008年 奨励品種選定試験
- ・2010年 品種登録出願、出願公表



写真1 「ゆめするが」一番茶新芽

### 2 一般特性

#### (1) 早晚性

「ゆめするが」の一番茶萌芽期は、「やぶきた」と比較し本場（牧之原、以下同）では3日、山間地（川根、以下同）では2日遅くなりました。「おくひかり」との比較では、本場では1日早く、山間地では1日遅くなりました。

一番茶摘採日は、調査年の平均で「やぶきた」に比べ本場では4日、山間地では1日遅くなりました。「おくひかり」との比較では、本場では2日早く、山間地では同じ日でした。

以上の結果から、「ゆめするが」の早晚性は、一番茶摘採期が「やぶきた」よりも4日程度遅く、「おくひかり」よりも1～2日早いやや晩生です。

表1 一番茶萌芽期及び摘採日

調査地	品種名	一番茶萌芽期					一番茶摘採日				
		4年目 <sup>1)</sup>	5年目	6年目	7年目	平均	4年目	5年目	6年目	7年目	平均
本場	ゆめするが	+3 <sup>2)</sup>	+2	+3	+5	+3	+2	+3	+7	+5	+4
	おくひかり	+1	+3	+4	+4	+4	- <sup>3)</sup>	+6	+7	+5	+6
山間地	ゆめするが	+4	+3	-2	-	+2	+3	±0	±0	-	+1
	おくひかり	+3	+4	-4	-	+1	+3	±0	±0	-	+1

<sup>1)</sup>定植後年数、<sup>2)</sup>「やぶきた」との差（+は遅い、-は早い）、<sup>3)</sup>未調査

## (2) 生育特性

「ゆめするが」の生育特性は、本場のデータでは樹高、株張りとも「やぶきた」に勝り、樹姿は中間型です。やや直立型の「やぶきた」、直立型の「おくひかり」とは明らかに異なります。秋整枝量は10a当たり、摘採面当たりとも多く、樹勢は極めて旺盛です。

表2 生育特性

調査地	品種名	樹高 (cm)	株張り (cm)	株張り/ 樹高×100 (%)	秋整枝量	
					10a 当たり (kg/10a)	摘採面当たり (g/m <sup>2</sup> )
本場	ゆめするが	129	171	132	1099	1035
	やぶきた	117	147	126	558	618
	おくひかり	142	150	106	971	1123
山間地	ゆめするが	111	125	113	997	1190
	やぶきた	115	120	105	705	870
	おくひかり	118	132	111	1157	1337

畦幅：本場 180cm、山間地 150cm

本場は定植7年目、山間地は定植6年目のデータ

## (3) 寒害及び病虫害抵抗性

### ア 寒害

「ゆめするが」の寒害（赤枯れ）発生程度は、「やぶきた」に比べてやや多い傾向にありますが、山間地のデータから見て寒害に対してはそれほど弱くはなく、中程度と思われます。

表3 寒害（赤枯れ）の発生程度

調査地	品種名	2年目*	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	平均	最大
本場	ゆめするが	3.0	3.0	2.0	3.0	2.0	2.0	2.5	3.0
	やぶきた	2.0	3.0	2.0	2.0	1.5	1.0	1.9	3.0
	おくひかり	1.0	2.0	1.0	2.0	1.0	1.0	1.3	2.0
山間地	ゆめするが	3.0	4.0	1.0	1.0	1.0	—	2.0	4.0
	やぶきた	3.0	3.0	2.0	1.0	1.0	—	2.0	3.0
	おくひかり	2.0	3.0	3.0	1.0	1.0	—	2.0	3.0

※定植後年数、発生程度：1（無）～5（多）

### イ 病虫害抵抗性

「ゆめするが」の炭疽病の発生は、「やぶきた」並みです。赤葉枯病、赤焼病に対しても、「おくひかり」より強く、「やぶきた」並みです。輪斑病に対しては「やぶきた」より強く、「おくひかり」と同程度のやや強です。また、クワシロカイガラムシの寄生は、「やぶきた」と同程度です。

表4 病害虫の発生程度

調査地	品種名	炭疽病	赤葉枯病	赤焼病	輪斑病	クワシロカイ ガラムシ
本場	ゆめするが	2.2	2.3	2.1	0.6	2.1
	やぶきた	2.5	2.4	2.2	1.9	2.5
	おくひかり	2.2	2.6	3.2	0.6	1.6
山間地	ゆめするが	2.4	1.5	1.4	—	2.0
	やぶきた	2.5	1.5	1.2	—	3.5
	おくひかり	1.8	1.5	1.5	—	2.0

調査年数 本場：炭疽病、赤焼病6年、赤葉枯病5年、輪斑病1年、クワシロカイガラムシ4年  
 山間地：炭疽病、赤焼病5年、赤葉枯病4年、クワシロカイガラムシ3年  
 発生程度：1（無）～5（多）、輪斑病のみ褐変指数：0（無）～5（全面褐変）

### 3 収量特性

「ゆめするが」の10a当たり生葉収量は、定植5年目から7年目までの平均で「やぶきた」に比べて本場では一番茶で190%、年間で176%と多く、山間地でも定植4年目から6年目までの平均で一番茶が131%、年間で155%と多収でした。「おくひかり」に比べても多収であり、畦幅の広い本場においてその差が大きくなりました。「ゆめするが」は「やぶきた」と比較して樹勢、株張りが優れることから特に早期の収量性が高くなりますが、定植7年目の成園化してきた状態でも高い収量性を維持しています。

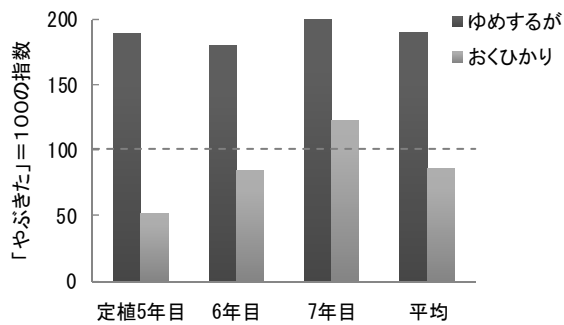


図1 10a 当たり生葉収量（本場・一番茶）

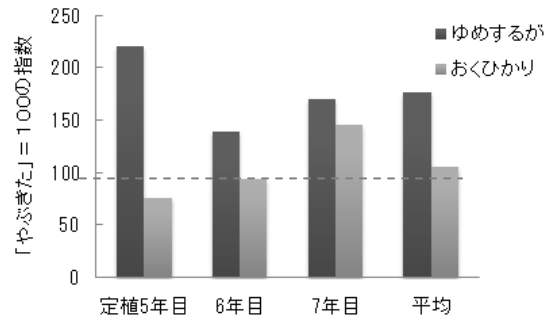


図2 10a 当たり生葉収量（本場・年間）

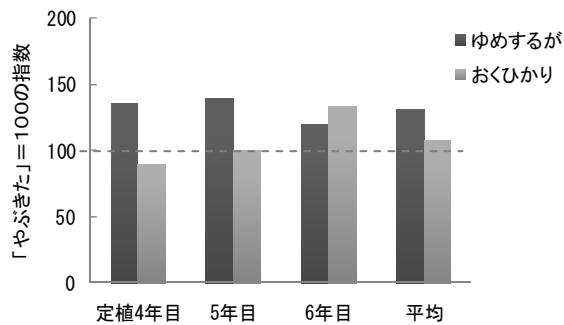


図3 10a 当たり生葉収量（山間地・一番茶）

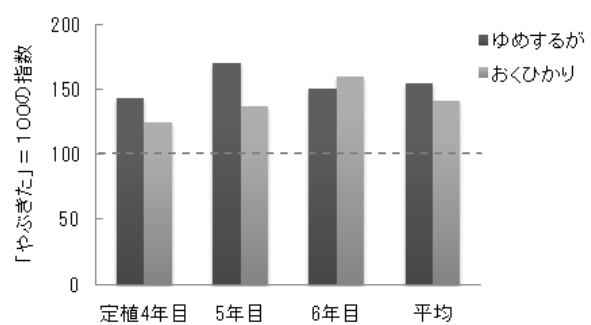


図4 10a 当たり生葉収量（山間地・年間）

摘採面当たり生葉収量においても、一番茶については3年間の平均で「やぶきた」と比較して本場が157%、山間地が123%でした。年間でも同様の傾向でした（データ省略）。

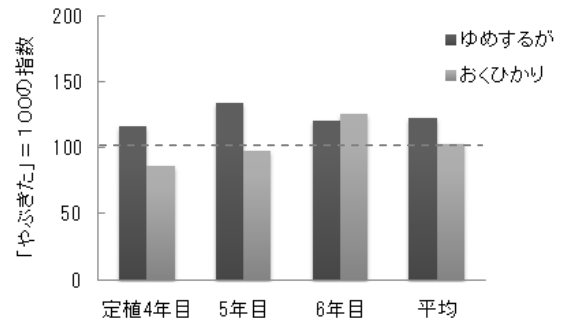
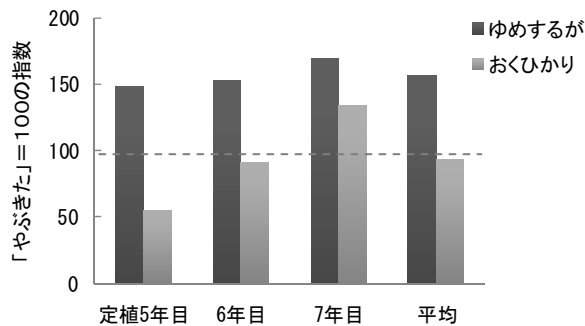


図5 摘採面当たり生葉収量（本場・一番茶） 図6 摘採面当たり生葉収量（山間地・一番茶）

一番茶の採摘調査では、本場、山間地とも「やぶきた、おくひかり」と比較して摘芽数が多く、芽数型の傾向を示しました。

表5 一番茶の採摘調査結果

調査地	品種名	摘芽長 (cm)	摘葉数 (枚)	出開き度 (%)	百芽重 (g)	摘芽数 (本)
本場	ゆめするが	4.3	2.9	26	44.3	58
	やぶきた	3.9	2.7	19	39.8	42
	おくひかり	5.5	2.7	14	58.5	32
山間地	ゆめするが	5.7	3.0	19	58.7	55
	やぶきた	4.3	3.0	68	69.6	50
	おくひかり	4.8	2.9	44	72.9	50

枠：20cm×20cm

本場は定植7年目、山間地は定植6年目のデータ

## 4 品質特性

### (1) 官能検査

「ゆめするが」の一番茶品質は、本場、山間地ともいずれの審査項目においても「やぶきた」と同等か優れていました。特に色沢、水色が優れ、「やぶきた」と比べた指数では、色沢で117～119、水色で110～112と大幅に上回りました。二番茶においても両調査地とも合計点では「やぶきた」と同等でしたが、色沢は指数で113～120と大幅に優れていました。審査概評では、外観が「細よれ、鮮緑」、内質が「さわやかな香り、スッキリした香り、甘い香り、渋味が少ない、まろやかな味、旨味あり」などが上げられました。



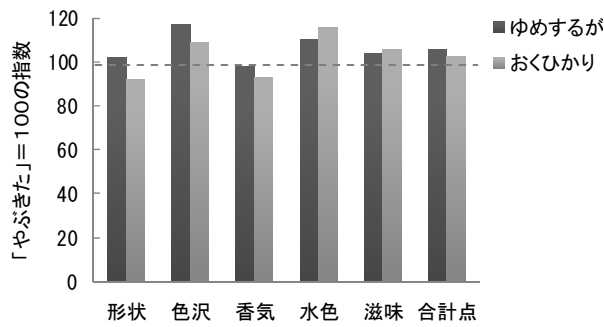


図7 官能検査結果 (本場・一番茶)

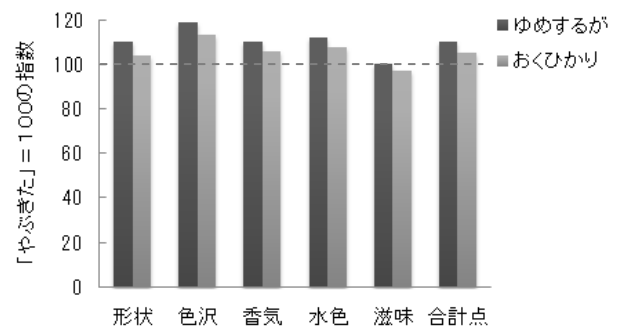


図8 官能検査結果 (山間地・一番茶)

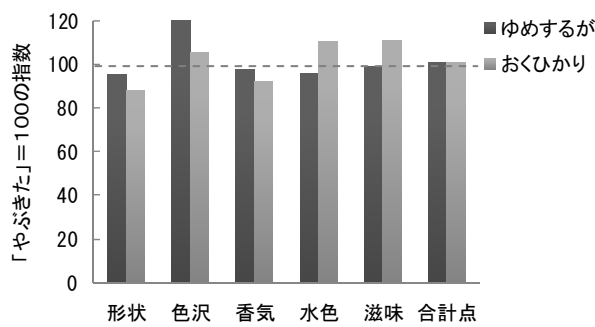


図9 官能検査結果 (本場・二番茶)

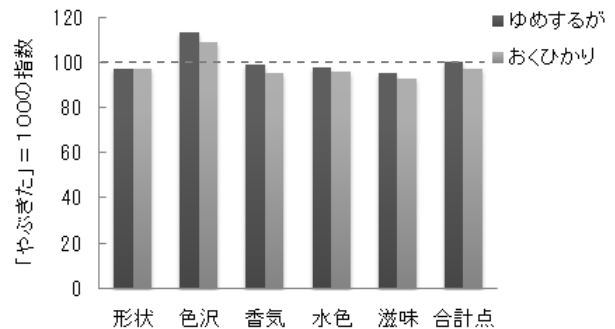


図10 官能検査結果 (山間地・二番茶)

## (2) 荒茶成分

「ゆめするが」の一番茶荒茶成分は、「やぶきた、おくひかり」に比較して渋味成分であるタンニン含有率が本場、山間地ともに低い傾向でした。この傾向は他の調査年でも見られました (データ省略)。

また、片井らの報告では、「ゆめするが」は主要カテキン類が少なく、クロロフィル類の多い傾向が見られています<sup>1)</sup>。さらに、香気成分量は「やぶきた、つゆひかり、香駿」に比べて少ない傾向にあります (データ省略)。

表6 一番茶荒茶成分 (1)

(d. w. %)

調査地	品種名	全窒素	繊維	カフェイン	タンニン	アミノ酸	テアニン	ビタミンC
本場	ゆめするが	5.3	17.1	3.4	13.9	2.6	1.4	0.20
	やぶきた	5.7	14.5	3.6	17.2	2.9	1.4	0.38
	おくひかり	5.2	16.8	3.4	15.7	2.3	1.2	0.27
山間地	ゆめするが	5.9	17.6	3.2	11.8	3.8	2.0	0.30
	やぶきた	5.2	18.8	3.1	15.1	2.6	1.4	0.36
	おくひかり	5.3	17.5	3.4	15.5	2.6	1.4	0.33

近赤外分析計で測定、本場は定植7年目、山間地は定植5年目のデータ

表7 一番茶荒茶成分(2)

品種名	主要カテキン類 <sup>1)</sup> 含有率 (d. w. %)	カフェイン含有率 (d. w. %)	クロロフィル類含有量指数 <sup>2)</sup>
ゆめするが	13.1	3.5	172
やぶきた	15.7	3.4	100
つゆひかり	13.2	3.8	122
香駿	19.3	3.7	155

<sup>1)</sup>EGCg、EGC、EC、ECgの合計

<sup>2)</sup>「やぶきた」のクロロフィル類含有量を100としたときの指数  
(片井ら2010)

## 5 特性のまとめ

- 早晚性は、一番茶摘採期が「やぶきた」に比べて4日遅い「やや晩生」です。
- 樹姿は「中間型」で、樹勢は「極強」です。
- 耐寒性は赤枯れ抵抗性が「中」です。
- 耐病虫性は、炭疽病は「弱」、赤葉枯病及び輪斑病は「やや強」、赤焼病は「中」です。クロシロカイガラムシに対しては「やや弱」です。
- 収量性は一番茶、年間とも「やぶきた」よりも多い「多」です。
- 摘採期の新芽数は多く、芽数型です。
- 品質は総合的に「良」で、特に色沢、水色が優れます。
- タンニン含有率、カテキン類含有率が低く、クロロフィル類含量が多い傾向です。

## 6 適地及び栽培上の留意点

今回の調査結果は、本場と山間地についてとりまとめたものですが、富士分場（富士市、2006年度で廃止）においても5年間適応性試験を行いました。その結果は概ね本場、山間地と同様で、「ゆめするが」は供試系統の中で収量、品質の両面で優れていました。

これらのことから、「ゆめするが」は調査した本場（牧之原）、山間地（川根）、富士分場（東部地域）のいずれにおいても生育が良好で、収量性、品質性も「やぶきた」以上であったことから、県内全域に適する品種だと思われます。また、経営形態としては、「ゆめするが」は優れた品質と早期から高い収量性が特徴の品種であり、樹勢が強くやや晩生であることから、品種組合せを行う大規模な機械化栽培経営に最適な品種と言えます。さらには、近年甚大な被害を受けた凍霜害に対しても「やぶきた」よりも被害を受けにくく、品種組合せに用いることで危険分散が図られます。

ただし、本場、富士分場において寒害（赤枯れ）の発生が「やぶきた」に比較してやや多く見られましたので、寒害発生時の常襲地など、特に冬期の気温が下がる地域では寒害対策が必要です。また、芽数型の特性がありますので、計画的な更新などにより適正な収量構成の維持が必要です。

## 7 嗜好調査結果

2010年2月に開催した茶業研究センター成果発表会会場において実施した嗜好調査の結果を紹介します。回答者数は119名で、男性が104名、女性が15名でした。職業別では生産者が57名で約半数を占め、JAや市町の職員が22名、茶商・小売店が9名、消費者が11名でした。

### ①「ゆめするが」の総合的な印象

「好き」が25%、「やや好き」が21%で両者を合わせると約半数が「ゆめするが」に好印象を持っていました。職業別では消費者が「好き」が36%と多く、「やや嫌い、嫌い」の回答はありませんでした。

### ②「ゆめするが」の水色、香り、味の嗜好

「ゆめするが」のセールスポイントである水色については、「好き」が36%、「やや好き」が39%で、合計では75%が高い評価でした。

香りは38%が「好き、やや好き」で、「ふつう」が55%と半数以上でした。また、香りについては女性（「好き、やや好き」が46%）や消費者（同64%）が比較的高い評価でした。

味は「好き」が27%、「やや好き」が29%で、合計では半数以上の56%が高い評価でした。また、茶商・小売店の方は67%が「好き、やや好き」の評価でした。

### ③「ゆめするが」の導入・購入の意向

「是非したい」が17%、「どちらかといえばしたい」が40%で、半数以上が導入や購入に前向きな意向でした。茶商・小売店の意向は、66%が前向きなものでした。

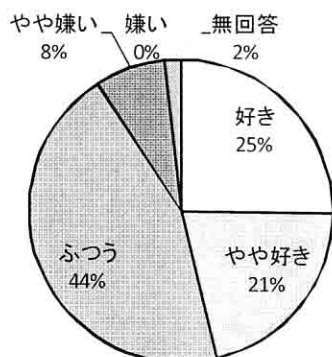


図11 「ゆめするが」の総合的な印象

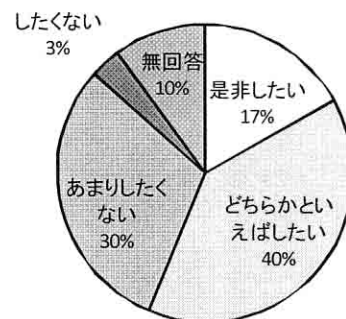


図13 「ゆめするが」の導入・購入の意向

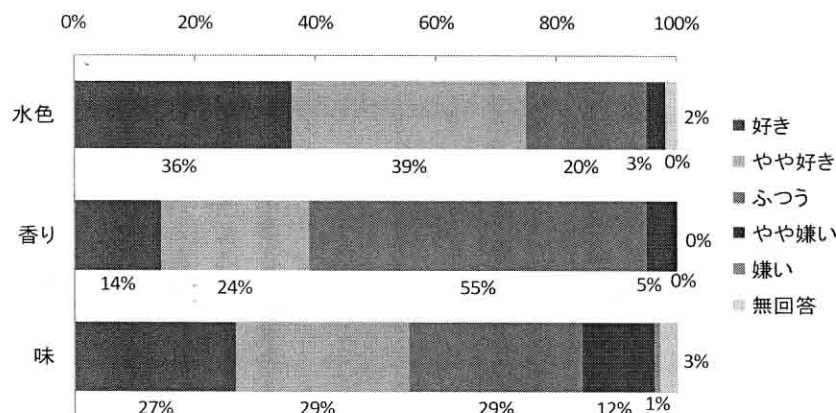


図12 「ゆめするが」の水色、香り、味に対する嗜好

## おわりに

今回育成した「ゆめするが」は、香味に「つゆひかり」や「香駿」のような際だった個性はありません。また、耐寒性や耐病性などのストレス耐性は、概ね「やぶきた」並みです。しかし、収量性は「やぶきた」よりも数段優れ、品質面では苦渋味が少なく、まろやかで誰にでも好まれる香味を有します。さらに、色沢、水色が非常に優れます。最近の市場評価は「色」が重視されますので、これは大きな強みです。やや晩生ですので「やぶきた」との組合せが可能で、摘採期の分散に活用できます。

このような特性を有する本品種を、他の晩生品種と比較すると、「おくひかり」に対しては、初期生育、収量性、品質（特に香味）で勝ります。「さわみずか」に対しては品質面で勝りますし、早晩性では「ゆめするが」は「やぶきた」と「さわみずか」の中間に位置します。また、「おくみどり」との比較でも摘採期が「やぶきた」との中間に位置します。摘採時期がほぼ同時期の「かなやみどり」に対しては、生育（樹勢）、収量性、品質面で優れると思われます。

以上のことから、「ゆめするが」は生産性、市場性とも高く、既存の晩生品種を凌ぐ優れた特性を有する品種であり、今後の静岡県茶業の発展に寄与できるものと思われます。

## 参考文献

- 1) 片井秀幸ら, 2010. 煎茶用新品種「ゆめするが」の化学成分, 茶研報, 110 (別), 6-7.

農林技術研究所・茶業研究センター  
栽培育種科長・鈴木康孝



写真2 「ゆめするが」一番茶摘採期の様子

発行年月：平成24年2月  
編集発行：静岡県経済産業部振興局研究調整課

〒420-8601  
静岡市葵区追手町9番6号  
TEL 054-221-2676

この情報は下記のホームページからご覧になれます。  
<http://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-130a/>